

『和名抄』のオニ（於邇） —「オニ（於邇）の由来と『儼』補説—

山口 建治

はじめに

数年前に「オニ（於邇）の由来と『儼』」という論文（以下、前稿と称する）を発表し、漢字の「鬼」が日本語でオニと読まれるようになった由来を追究した（山口 2001）。中国民間の「瘧鬼を遣る」（「遣瘧」）儀礼＝「儼」が民間ルートで伝えられ、「瘧鬼」の「瘧」の音オニが和語として定着したのであろうと推測した。「儼」がオニヤライと訓ぜられるようになったのは、まさしくオニ（瘧）を遣る儀礼だったからなのである。その際、四種の『和名抄』のテキストを比較して得られた結果をひとつの根拠とした。資料として『和名抄』をとりあげたのは、日本語文献のなかで最初にオニ（於邇）という語が記載され、しかもオニの語源は「隱」の漢字音が転訛したものという「或説云・・・」（以下、隠字音説と略称する）の記述があり、オニの語源探求には外せない書物と考えたからである。

前稿で『和名抄』の分析結果として二点指摘した。その一つは今日ほぼ通説化している隠字音説の記載箇所は、おそらく後人による挿入部分であり、隠字音説はたんなる当て字に過ぎないということである。もう一点は、「瘧鬼」の条に「瘧鬼」としてのオニ（於邇）が出るが、平安時代に「鬼」の訓がモノからオニに転換した事実と重ね合わせて考えると、「瘧鬼」としてのオニの観念が肥大化した結果、モノからオニへと「鬼」の訓が移っていったのであろうと推測した。

結論については今なお変わらないが、隠字音説を批判した部分はいささか分かり難い記述になっている。何より10巻本系テキストと20巻本系テキストとの違いを十分考慮に入れた説明になっていなかったため、10巻本の「人神」の条と20巻本の「鬼」の条が対応する見合いの関係になることが、必ずしもあらかじめ明らかにされていなかった。小論では、この点をあらためて確認したうえ、前稿の『和名抄』のオニ（於邇）について述べた部分（「一 オニ（於邇）の出現」）の補足と修正をしておきたい。

古辞書のテキスト間の些細な異同を穿鑿することに、どれほどの意味があるのかという思

いがしないわけではないが、ことはオニということばが日本語のなかにどのようにして登場したか、に関わる大問題である。このオニの語源探索を通して、「郷儼」といわれる中国民間の儀礼がこの列島の古代社会に伝播し、列島の習俗と重なりつつ土着化し、しだいに渡来文化の色彩を薄め、ついには忘れ去られる経緯が次第に明かされるものと信じている。小論はそのような仮説を検証する作業の端緒をなすものである。

一 「人神」か「鬼」か

(1) 10巻本と20巻本の見出し語の異同 (注1)

『和名抄』10巻本と20巻本を較べると、歳事部など新たな部を設け、見出し語を増補したほかに、部類を細分化した(10巻本の128類を20巻本では159類に細分化)ことが大きな特徴になっている(川瀬一馬 1986)。たとえばオニ(「於邇」「於爾」など表記が違う場合があるが、「於邇」あるいはオニで統一する)がでる10巻本神霊類に対応する20巻本鬼神部は神霊類16、鬼魅類17の2類に分けている。いま10巻本の神霊類と20巻本の鬼神部の見出し語を対応させた表を掲げる。真福寺10巻本を基準に異同を表示する。○は真福寺本の見出し語と同じ場合、×は真福寺にある見出し語が無い場合、()に括ったのは漢字に少し変動がある場合の印である。また、移動とあるのは、その語の置かれた位置が20巻本では大きく違っている場合であり、[]で括ってその移動先を示している。前田10巻本には、多くの場合、見出し語にカタカナ表記のルビが付されているが、必要なもの以外は省略した。

	真福寺 10	前田10		伊勢20	元和20
卷一、神霊類三	天神	○	卷二神霊類第一六	○	○
				心神	心神
	地神	○		(地祇)	(地祇)
	人神	人神オニ		×	×
	霊	○		移動	移動
	天一神	(太白神)		○	○
	太白神	(天一神)		○	○
	雷公	○		○	○

	山神	○		○	○
	海神	○		○	○
				(河伯)	(河伯)
	河伯神	(河伯)		旱魃	旱魃
	土公	○		○	○
	産靈	○		○	○
	道祖	○		○	○
	岐神	○		○	○
	道神	○		○	○
	保食神	○		○	○
	稻魂	○		○	○
	幸魂	○		○	○
	現人神	○		○	○
				[樹神]	[樹神]
				[水神]	[水神]
				[靈]	[靈]
			卷二鬼魅類第一七	鬼	鬼
				餓鬼	餓鬼
				[瘡鬼]	[瘡鬼]
	邪鬼	○		○	○
	窮鬼	○		○	○
	魔鬼	○		×	×
	瘡鬼	○エヤミノカミ		移動	移動
	樹神	○		移動	移動
	水神	○		移動	移動
	魍魎	○		○	○
				魍魎	魍魎
	醜女	○		○	○
	天探女	○		○	○

(2) 異同の注目点

『和名抄』の記載の形式を馬淵和夫氏の文により紹介しておく。「(原著序文の編集方針を述べた箇所に)『先挙本文正説、各附出於其注』という文言があり・・・まず中国語の物の名称を見出し語として出し、その出典(本文正説)を挙げ、その注文も必要に応じて出し、発音も反切や同音字によって確かめ、その後でその見出し語に対応する「和名」を割注の形式で出しているのである」(馬淵和夫 2008)。以下、小論では、見出し語の下にある、その語の出典や注および和訓などを含むすべてを仮に解説部分と称することにする。

前掲の表を一瞥して注目すべき点を列記する。

- ① 10巻本の「神霊類」に属していた見出し語を、20巻本では、「神霊類」と「鬼魅類」に分類させている。「神霊類」は善神、「鬼魅類」は悪神という、人に対する善悪で区分している。10巻本には「鬼」という見出し語は無く、20巻本の「鬼」は「鬼魅類」の冒頭に置かれている。
- ② 10巻本は「天神」「地神」「人神」が整然と並んでいる。それに対して20巻本では、「地神」に対応するのが「地祇」であり、「人神」に対応させているように見えるのは「心神」という見出し語である。しかし不思議なことにこの「心神」は見出し語だけで、出典などを挙げる解説部分が空白になっている。
- ③ 10巻本の「人神」に、実際上対応するのは20巻本の鬼魅類の「鬼」である。それぞれの解説部分の内容がほぼ同じだからである。つまり10巻本の「人神」の条と20巻本の「鬼」の条は、ほぼ同一内容の解説部分から成り、対応関係がある。前田10巻本の「人神」にオニのルビが振られていることから「鬼」の条と同一視されていたことがわかる。ただ、前稿で指摘したように、この両者の異同には大いなる問題が潜んでいる。この点については後述する。
- ④ 10巻本から20巻本への増補で付加された見出し語は「心神」「旱魃(魃)」「餓鬼」「魍魎」であり、10巻本にあったものが20巻本では無くなったのは「魔鬼」である。そのうち「心神」は解説部分が無い、無内容の条であり、増補の語彙は3条にすぎない。20巻本が編集された大きな理由が部類の細分化にあったとことがここからも窺える。

(3) テキストの異同から推測できること

10巻本「人神」が問題をおおくはらんでいることは前稿でも指摘したが、ここであらためて、20巻本「心神」の条もふくめてその問題点を列記してみる。

- ① 出典に「周易」をあげるのは間違い

10巻本では「天神 周易云天神曰神・・・」、「地神 周易云地神曰祇・・・」、「人神 周易云人神曰鬼・・・」とならび、その解説部分は、いずれも「周易云・・・」とあり整然としていて、かえって不自然である。狩谷棭齋も「天神」以下の三条の出典に問題ありとして、「以下三条の引くところの周易は、経文および王弼の注を檢べるにみな載せず・・・(以下三條所引周易檢經文及王弼注、皆不載・・・)」と述べ(狩谷棭齋の引用文はすべて『箋注倭名類聚抄』からである。以下いちいち断らないが同じである。)、『文選』における『周禮』からの引用文と李善の注を、「おそらく源君は李善の言も併せて周禮からの引用と誤り、転写の際にまた誤って周易としたのであろう(「疑源君誤并李善之言爲周禮文引之、轉寫又誤爲周易也。)」と推測している。二重の過ちがあることになる。とくに「人神」の条は、後述するように20巻本の「鬼」に対応する条であり、原本に「人神」を見出し語とする条が存在したかどうか甚だ疑わしい。

② 「人神」ではなく「鬼」が原本の見出し語

現存するテキストから判断するかぎり、10巻本系統テキストは「人神」を見出し語にし、20巻本系統テキストは「鬼」を見出し語にして鬼魅類に属させていることがわかる。原テキストの部類が細分化され、10巻本系統と20巻本系統に分かれるときに、「人神」を見出し語にする10巻本系統と、「鬼」を見出し語にする20巻本系統に分かれたということである。その分岐の段階で「人神」を見出し語にするか「鬼」を見出し語にするか戸惑いがあったということであろう。『漢語大詞典』によると「人神」とは「先祖の神霊」の意であり、漢語「鬼」の説明概念の一つと考えられるが、民間信仰で「驅鬼・打鬼」(魔除け)という時の「鬼」のニュアンス(通常「癘鬼」という)とは大いに異なる。日本語のオニは無論後者の意であろう。「人神」と「鬼」の分岐の背景には、漢語「鬼」自体の語義の分岐が深く絡んでいる。

「人神」と「鬼」のどちらが見出し語として相応しかったかを判断するに、「鬼」を見出し語とする方が、漢和辞典として断然理にかなっている。「鬼」の音を反切で示し、その「和名」があるからである。10巻本が全体としては原テキストの姿に近いとしても、この「人神」と「鬼」の条を比べる限りでは、「鬼」を見出し語とする20巻本のこの条が原テキストのものと姿に近いと判断せざるを得ないのである。狩谷棭齋も「広本(狩谷棭齋は校注に用いた20巻本系統テキストを総称してかくいう)には『周易云人神曰鬼』の七字は無く、それが正しいようだ(広本無周易云人神曰鬼、似是。)」と述べている。

③ 「心神」について

20巻本の「心神」の条は、見出し語のみで解説部分が無いという、奇妙な姿を示してい

③ 元和古活字本（二十卷、17世紀初期）

鬼 四聲字苑云、鬼居偉反和名於爾。或説云隱字音於爾訛也。鬼物隱而不欲顯形、故俗呼

B1 Z Y

曰隱也。人死魂神也。一云吳人曰鬼、越人曰魑、音蟻又折反。

B2 A

④ 前田本（十卷、明治時代写）

^{オニ}人神 周易云、人神曰鬼居偉反、和名於邇。或説云、隱而於邇者、隱音之訛也。鬼物形故不欲顯、以稱

X Z Y

也（隱而以下、語序の錯乱甚だしい）。唐韻云、吳人曰鬼、越人曰魑音蟻、又音折。

A

四聲字苑云、鬼、人死神魂也。

B

前稿でも指摘したように、解説部分を構成している要素は、①～④を通して、「或説・・・」のY、『四声字苑』のB、『唐韻』のAからなり、①と④の10巻本系統にはそれらに加えて、「周易云・・・」のXがある。前稿では、「鬼居傳反和名於邇」という「鬼」字の反切と和訓を万葉仮名で表記した部分を、Xに含めて下線を引いたり、『四声字苑』Bの部分に含めて下線を引いたりして、一体どちらの要素になるのか、何の説明もしなかった。この部分、すなわち「鬼」の反切と和訓の部分は、いわば『和名抄』の解説部分の根幹部であり、この部分が、①④のXのように、原テキストでも「周易云人神曰・・・」の部分に出るのか、それとも②③のように『四声字苑』の部分に出るのかは、じつは決定的な意味を持つことであった。今はそれを決めることを一時棚上げして、この部分に二重の下線を付してZとしておく。

さらに前稿では、触れなかったことだが、④の前田本テキストの錯乱を原文のまま記述したが、実は、この錯乱は割注の行末二行それぞれ二字分をそのまま次の行の行頭に移せば意味が通じるようになっており、書写段階での錯誤と判断される。他の箇所にも同様な誤りが認められ、そのことに気付いた人がいたのだろう、テキスト自体に改行部の書写の誤り示す線が記入されている。今、その誤りを正すと④「人神」の条は次のようになる。

④' （修正）前田本（十卷、明治時代写）「人神」の条

^{オニ}人神 周易云、人神曰鬼居偉反、和名於邇。或説云、於邇者、隱音之訛也。鬼物隱而不欲顯形、故以稱也。

X Z Y

唐韻云、吳人曰鬼、越人曰魃音蟻、又音祈。四聲字苑云、鬼、人死神魂也。

A

B

となり、①の「人神」の条とほとんど違いはない。「和名」の位置と「故以称之」が「故以称也」となっているくらいの違いである。

解説部分の構成要素は、10巻本も20巻本も基本的に同一の内容を持つという前提のもとで、あらためて①②③④'を見くらべて推理すると、次のように整理できる。

1 X「周易云人神曰」は、「人神」を見出し語にするための作為と考えられるので、②③の「鬼」を見出し語とする条を原テキストに近いものとする。

2 ただし、①と④'で出典が明示されている『唐韻』と『四声字苑』からの引用部分は、原テキストの内容を示していると考えられる。

3 『唐韻』からの引用部分Aは四種のテキスト間でほぼ同じ（唐韻云と一云の違いのみ）で問題ない。しかし『四声字苑』からの引用部分は、二系統のテキスト間で大きな差異がある。①④'ではBの「四聲字苑云、鬼、人死神魂也」である。②③はB1の「四聲字苑云、鬼居偉反和名於爾」とあり、その後にY「或説云・・・」が続き、さらにその後にB2「人死神魂也」がある。①④'の「神魂」と②③の「魂神」の二字が前後逆になる差異は大目に見て無視すると、このB2はBの後半部であろうと推測できる。

4 つまり原テキストは、BとAから成り立っていたと推測可能であり、「鬼 四聲字苑云、鬼居偉反和名於爾。人死神魂也。一（あるいは『唐韻』）云吳人曰鬼、越人曰魃、音蟻又祈反。」というのが原貌に近いと推定できる。したがって「或説云・・・」部分は、後人による挿入と考えられるというのである。

三 瘡鬼としてのオニ

10巻本系かあるいは20巻本系かを問わず、「瘡鬼」の条はテキスト間で大きな異同はない。いま、それぞれの「瘡鬼」の条を記すと、以下のようになる。

① 尾張（真福寺）本（十巻、鎌倉時代写）

瘡鬼 蔡邕獨斷云、昔顓頊有三子、亡去而為疫鬼。其一者居江水、是為瘡鬼和一名衣夜美乃於邇。

② 伊勢二十巻本（室町時代初期写）

瘡鬼 蔡邕獨斷云、昔顓頊有三子、亡去而為疫鬼、其一者居江水、是為一一（瘡鬼）和名衣也美乃加美或於邇。

③ 元和古活字本（二十卷、17世紀初期）

瘡鬼 蔡邕獨斷云、昔顓頊有三子、亡去而為疫鬼、其一者居江水、是為瘡鬼和名衣也美乃加美或於爾

④ 前田本（十卷、明治時代写）

瘡鬼 蔡邕獨斷云、昔顓頊有三子、亡去而為疫鬼、其一者居江水、是為一一（瘡鬼）也和名衣夜美乃加美。

本文部分はほぼ差異がない（④の文末に也があるところだけが違う）。小文字の割注部分がそれぞれ微妙に異なっている。

①「和名衣夜美乃於邇」 和名エヤミノオニ。狩谷掖齋が指摘するように、エヤミノカミとすべきところを誤ったのであろう。

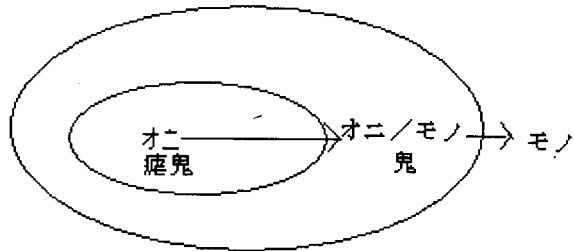
②「和名衣也美乃加美或於邇」 和名エヤミノカミ或はオニ。

③「和名衣也美乃加美或於爾」

ここの「或於爾」の表記はどう理解すべきか悩ましい。漢語の「瘡鬼」に対する「或」のようにも見える。つまり、漢語の「瘡鬼」とは別に、オニという音の別の漢語があるようにも見える。オニが和語なのかそれともある漢語の音を示しているのかよく分からないような表記になっている。

④「和名衣夜美乃加美」 和名エヤミノカミ

「瘡鬼」の条の注から窺えることは、この漢語に相当する和語にエヤミノカミあるいはオニがあると、『和名抄』編纂時の平安中期には考えられていたということである。前稿でも試みたことだが、二で述べた「鬼」の条に出るオニ（於邇）と「瘡鬼」のオニ（於邇）を併せて考察すると、以下のように推測できる。「鬼」は『万葉集』ではモノと訓じられていたから、平安時代になってオニという訓が成立したのは明らかである。それまで「鬼」をオニと読むことはなかったとすれば、「瘡鬼」としてのオニが肥大化し、一般的な「鬼」にオーバーラップするようになったからではないか、その結果として「鬼」がオニと訓じられるようになったのではないかと推理できるのである。これを図式化すると、次のようになる。



この「瘧鬼」を中国南方では「瘟鬼」とも称し、道教徒が盛んに「遣瘟」の儀礼を行った結果、それが日本列島にも伝播し、追儺すなわち鬼追いの民俗行事となり、「オニ（瘟）」という語が日本語の中に生ずることになったのであろうと、前稿で述べたのである。

(注)

1 使用テキスト

『和名類聚抄古写本声点本本文および索引』（馬淵和夫著、風間書房刊）

狩谷椽斎『箋注倭名類聚抄』（京大言語国文学研究室篇『諸本集成倭名類聚抄』所収）

参考文献

- 1 山口建治 2001, 11-12号 「文学」 岩波書店
- 2 川瀬一馬 1986 再版 『増訂 古辞書の研究』 有松堂
- 3 馬淵和夫 2008 『古写本和名類聚抄集成第一部』 勉誠出版